

社会情報学部における SA 制度の現状と展望

— SA 志望者数の観点から —

On the status and the future prospect of the SA system in the faculty of
Social Information

— Analysis on the basis of the number of applicants to the SA —

高橋 泰明*・森田 彦**

札幌学院大学社会情報学部では、1996年度より本学部学生からなる Student Assistant (SA) を採用し、主にコンピュータを用いた演習科目における受講生の学習支援を担当している。これは、受講生の質問や様々なトラブルに先輩学生として対処するもので、学部が目指すきめ細やかな教育を実現するための重要な役割を担っている。しかし、ここ数年 SA に応募する学生が減少傾向にあり、SA 不足が顕在化しつつある。そこで本論文では、SA 志望者数の現状を改めて把握し、今後の見込みを、学生に対するアンケート調査によって明らかにすることを試みた。さらに、それら調査結果に基づいて、今後、安定的に SA を確保するために必要と思われる幾つかの方策の提言を試みている。

1 序論

札幌学院大学社会情報学部では、学生一人一人が所持するノートパソコンを活用して講義・演習が一体となった授業が展開される科目が多数配置され、それが学部教育の特徴を成している。その中でも「プログラミング・同演習」などのように演習主体の科目では、コンピュータの動作不良を含むトラブルへの対応や、課題に関する様々な質問への対応を教員一人が行うことが困難となる。そのため、大学院生からなる Teaching Assistant (以下 TA) あるいは、本学部学生からなる Student Assistant (以下 SA) を配置し、彼らが受講生の出欠確認、課題チェック、質問やマシントラブルなどへの個別的な対応に当たるシス

テムをとっている。本論文では、この内、SA について注目する。

SA 制度は、1996年度の「情報処理基礎・同演習」で初めて試験的に導入され、その定着をみて、2002年度から他の演習科目でも順次導入されるようになった。そして、2007年度現在、14科目でSAを採用するに至っている。時たま、一部のSAについて指導の熟練度に関する苦情があるものの、先輩学生として接する親しみやすさから受講生のSAに対する評判はすこぶる良く、今や、学部が目指すきめ細やかな教育を実現する上で欠くことのできない重要な役割を担っている。SA制度の学部教育への寄与、さらにそれがもたらす効果については、森田が詳細に論考している(森田, 2005)。

さて、この様に順調に発展してきたSA制

*TAKAHASHI Yasuaki 札幌学院大学社会情報学部研究生

**MORITA Hiko 札幌学院大学社会情報学部

度であるが、最近気になる傾向が見られる。それは、SA に応募する学生が減少傾向にあるという点である。実際、各年度の SA 採用者数の募集人数に対する割合を調べると、2004 年度は 94.71%、2005 年度は 93.21%、2006 年度は 80.95%、そして 2007 年度は 72.66%と、確かに年々、募集人数に対する充足率が減少傾向にある。ここに募集人数は、対象科目の前年度の履修者人数の予想に基づくものなので、実際の運営上は必ずしも 100%になる必要はない。実際、SA を募集する各科目の採用状況を調べてみると、2005 年度以前は、募集人数に対して SA の人数が若干少ない科目があったものの、実際の履修者人数に対して SA の人数が足りないということにはなかったのである。しかし、2006 年度は、一部の科目で SA が不足する状況となり、さらに 2007 年度は、ほとんどの科目で追加募集を行わなければならない状況になっている。このままこの傾向が続けば、SA の人員不足が深刻になり、SA 制度の安定的運用に支障が出るのが懸念される。そこで、SA の志望者が今後も減り続けるのか、もしそうであればその原因は何か、ということをごここで調査しておくことは、今後も SA 制度を安定的に運用する上で必要であろう。

そこで、本論文では、現時点における潜在的な SA 志望者数の割合を把握すべく、本学部 1 年生から 3 年生の学生を対象に「SA 制度に関する意識調査」というアンケート調査を実施することにした。そうして、SA 志望の有無に加え、それぞれの理由を明らかにすることで、今後、SA 志望者を安定的に確保するためのヒントを得られるのではないかと考えた。

さらに、現在活動している SA に対しても、アンケート調査という形で現行 SA 制度に対する意見・要望を聴取することにした。SA から見た今後の SA 制度充実に向けての意見・要望を集約することは、今後の同制度の発展

を考える上で有益と考える。

以下、第 2 章で SA 志望者数の減少傾向をより具体的に把握した上で、第 3 章でアンケート調査方法の概要について説明する。そして第 4 章でアンケート調査結果の分析から、SA を志望する理由および志望しない理由を明らかにし、そこから読み取れる学生の傾向について考察する。さらに、SA に対するアンケート調査の分析から、今後の SA 制度改善に向けての要望を集約することにする。最後に第 5 章で結論と今後の課題を述べる。なお、本論文では、社会情報学部の SA 制度について論じて行くことになるが、そこで得られる知見は、必ずしも本学部のみ限定されるものではなく、同じく SA を活用している他大学でも参考になる部分があるのではないかと考えている。安定的に SA を確保することは、このような SA 制度が有効に機能するために最も重要な点であるからである。

2 SA 志望者数の減少傾向

第 1 章で述べた通り、現在 SA 応募者は減少傾向にある。この実態をもう少し詳しく見てみよう。

まず、過去 4 年度の採用状況を調べてみると、2004、2005 年度の両年度は、ほとんどの科目で募集人数に採用者数が達していた。また、募集人数に数名ほど採用人数が達していない科目が幾つかあったが、これは実際の履修者からみて、ほぼ支障なく演習を行える人数で、適正に採用者人数を絞った結果と言える。問題は 2006 年度以降である。第 1 章で述べた通り、募集者に対する採用者の充足率でみると、2006 年度は 80.95%、そして 2007 年度は 72.66%と、SA の不足が顕在化して来た。

例年、募集人数よりも SA 採用者数が不足している場合、科目によっては追加募集が行われるが、2006 年度前期では「データ解析基礎 II」で 9 名、「データベース基礎・同演習」

で10名の追加募集が必要になった。これが、大きな不足であることは明らかである。ただ、これ以外の科目では、募集人数にSA採用者数が達するか、募集人数に達していなくても数名少ない程度であった。したがって、追加募集が行われる科目も限定されていたと言える。ところが、2007年度は大幅な追加募集が必要になった。表1を見てみよう。

この表より、2007年度前期では、SAを募集した9科目の内、履修者に対して十分な人数に達した科目は2科目しかなく、残り7科目で追加募集が実施された事が分かる。しかも、表の採用人数欄の（ ）内の数と追加募集人数とを比較すれば分かる通り、追加募集を実施しても、目標通りのSAが集まらなかった科目もある。2007年度後期でも、SAを募集した6科目の内、募集人数に採用者数が達した科目は1科目しかなく、残り5科目でSAの人数が不足した為、追加募集を余儀なくされた。前期に比べればSAの人数が極端に不足するという事はなかったが、それでも追加募集による採用者を加えることで、ようや

く所定のSAを確保できたという状況である。

このように、2007年度は、大半の科目で追加募集によるSAの人員確保が必要となった。特に、「データ解析基礎II」、「データベース基礎・同演習」、「データ解析II」の3科目では、不足数が多く、それが演習の円滑な運営に支障を与えた事が危惧される。これが、2007年度におけるSA応募状況の実態である。

このように、SAが年々、減少傾向にあるが、本当にSAをやりたいと思っている学生はいないのであろうか。このことを明らかにする為に、社会情報学部生を対象にSA制度に関する意識調査という形でアンケート調査を行うこととした。アンケート調査の概要については、次章で述べる。

3 アンケート調査の概要

SA制度に対する意識調査アンケートは、社会情報学部の1～3年生を対象に、2007年度前期と後期に各1回、合計2回に分けて

表1 2007年度SA募集概要

前期募集科目	追加募集	採用人数	応募資格
情報処理基礎・同演習	－	16名(0)	2年生以上
データ解析基礎II	7名	6名(1)	3年生以上
データ構造とアルゴリズム論・同演習	－	5名(0)	3年生以上
データベース基礎・同演習	9名	8名(2)	3年生以上
コンピューティング環境管理論	1名	2名(1)	3年生以上
データ解析II	10名	3名(1)	4年生
情報通信ネットワーク論・同演習(1)	1名	2名(0)	4年生
情報通信ネットワーク論・同演習(2)	1名	2名(0)	4年生
情報メディア演習I	4名	2名(2)	3年生以上
後期募集科目	追加募集	採用人数	応募資格
データ解析基礎I	9名	14名(7)	2年生以上
プログラミング・同演習	6名	20名(6)	2年生以上
データ解析I	－	8名(0)	3年生以上
コンピュータアーキテクチャ	2名	2名(1)	3年生以上
マルチメディア処理論・同演習	4名	11名(3)	3年生以上
情報メディア演習II	2名	0名(0)	3年生以上

「採用人数」の（ ）内の数字は、採用者の内、追加募集による採用人数

行った。さらに、現職のSAの立場からの意見を把握するため、2007年度前期に採用されたSAに対して、主にSA制度に対する意見や要望を聴取する、という内容の調査を行った。なお、前期に行った学生対象のアンケートは予備調査的な意味合いを持つものとして実施し、その結果の分析を踏まえて、アンケートの質問項目の改善や取捨選択を行った上で、後期のアンケート調査を本調査と位置づけて行った。したがって、次章以降の分析に実際に用いているのは後期に実施したアンケート調査の結果である。アンケートは、社会情報学部の幾つかの講義時に担当教員の許可を得た上で行った。表2に実施した科目や時期をまとめておく。

アンケートの回答状況は表3の通りである。また、アンケートの質問項目については、実際の分析に用いたものを抜粋し巻末に資料

として掲載している。

4 SA制度に対する意識調査の結果と分析

4-1 SA志望者数の現状

今回我々が最も注目したのは、実際にどの程度の学生がSAをやってみたいと思っているか、という点である。それをアンケート結果から調べてみると、SAをやりたいと思っている学生は全体の24.5% (278名中68名) に達している事が分かった。つまり回答者全体の4人に1人は、SAをやってみたいと思っている訳で、これは、我々の当初の予想を超える割合であった。もし、これら潜在的にSAをやってみたいと思っている学生が実際にSAに志望すると、必要な人員を確保できる可能性は十分にある。

そこで、さらに科目別のSA志望者数を集

表2 アンケート調査実施概要

実施日時	科目名	対象者
2007年 6月26日(火) 1・2講時	データベース基礎・同演習	各科目のSA
2007年 7月10日(火) 3・4講時	情報処理基礎・同演習	
2007年12月 3日(月) 1・2講時	マルチメディア処理論・同演習	S 05, S 06
2007年12月 5日(水) 1講時	オペレーティングシステム論	S 05
2007年12月 5日(水) 2講時	電子メディア論	S 05, S 06
2007年12月 7日(金) 1講時	社会情報学 I	S 06
2007年12月 7日(金) 2講時	情報と職業	S 05
2007年12月14日(金) 3講時	シミュレーション基礎論	S 05
2007年12月14日(金) 3講時	社会とコミュニケーション (2)	S 07が主
2007年12月19日(水) 3講時	社会とコミュニケーション (1)	S 07が主
2007年12月25日(火) 3講時	プログラミング	S 07が主

S 05, S 06, S 07 は、2005年度入学生、2006年度入学生、2007年度入学生を示す。

表3 アンケート調査の回答者数と回答率

分類	回答数	回答率
2007年度・前期に採用されたSAに対するアンケート	21名	95.5%
2005年度入学生全体(3年生)	74名	58.3%
2006年度入学生全体(2年生)	94名	80.3%
2007年度入学生全体(1年生)	110名	72.8%
2005年度入学生～2007年度入学生(1年生～3年生)の合計	278名	69.7%

回答率は、(回答者数÷各学年全体の人数)で算出。

SAに対するアンケートは、(回答者数÷前期のSA採用者の実人数)で算出。

計してみた。その結果が表4である。この表より、SA志望者が2007年度の募集人数に達しない科目は、14科目中、3科目に留まる事が分かる。さらにその内、不足人数が数名以内に留まっている2科目を除くと、SA不足数が一定以上になるのは「データベース基礎・同演習」1科目のみとなる。この志望者数は、アンケートへの回答者のみを母集団とした人数なので、実際の志望者数はこれよりも多くなるはずである。そうすると、数の上では、大半の科目で必要なSAの人数を確保できる見込みがあると言える。

続いて、2007年度時点の1年から3年までの学年毎に、SAを志望する学生の割合を調べてみた。すると、3年生は24.3%、2年生は23.4%、そして1年生25.5%となり、学年間に大きな差は見られなかった。このことは、学年変動なく、今後安定的にSAの人員を確保できる可能性があることを示唆している。このように、アンケート調査の結果からは、SAの人員確保については、明るい見通しが持てるといえよう。

しかし、実際には第2章で述べた通り、2007年度については、SAの不足が深刻になって

いる。これはなぜであろうか。最も考えられるのは、潜在的なSA志望者がいるものの、彼らが実際には応募しない、あるいはできない要因がある、という可能性である。この観点からその要因を探って行くと、次の2点が候補として浮かび上がってくる。まず、第一の要因は、SAの募集方法である。特にSA不足が顕著である前期の場合、募集時期が年度当初の1週間弱に限られるため、SA候補者が希望する演習科目のSAへの応募を検討する余裕をあまり持てない事が考えられる。時間割は年度当初に発表されるため、SA候補者も、まずは自身の時間割やアルバイト等その他の週間スケジュールの確定に追われる。そしてその後にSAへの応募を考えるため、十分なスケジュール調整ができない事が予想される。この点に関して、2007年度の場合は3月から募集のアナウンスを始めるよう改善したのだが、募集科目の開講曜日や時間帯が分からない段階では、学生にとっては応募しにくい。実際、2007年の場合、森田は4～5名ほどのSA志望学生から開講曜日に関する問い合わせを受けた。現時点では、公平性の観点から、新年度になるまでは学生に時間割を

表4 科目別 SA 志望者数

科目名	3年生	2年生	1年生	合計	募集
情報処理基礎・同演習	14名	10名	18名	42名	16名
データ解析基礎 I	11名	12名	13名	36名	16名
データ解析基礎 II	8名	12名	1名	21名	12名
データ解析 I	5名	3名	1名	9名	8名
データ解析 II	3名	3名	1名	7名	10名
プログラミング・同演習	10名	8名	13名	31名	20名
データ構造とアルゴリズム論・同演習	7名	5名	0名	12名	10名
データベース基礎・同演習	3名	3名	1名	7名	15名
マルチメディア処理論・同演習	3名	9名	0名	12名	12名
情報通信ネットワーク論・同演習	4名	0名	0名	4名	3名
コンピューティング環境管理論	3名	3名	0名	6名	3名
コンピュータアーキテクチャ	3名	1名	0名	4名	3名
情報メディア演習 I	3名	0名	0名	3名	4名
情報メディア演習 II	2名	1名	0名	3名	2名

公表しない方針を大学側がとっているが、せめてSAを募集する科目の時間割は事前に公表する必要がある。続いて、第二の点は、SAを募集する演習科目と、SA志望者が所属する専門ゼミの時間割が重なるケースが多い、という点である。これは、時間割の調整がかなり大変な作業になっている現状を考えるとやむを得ない点ではあるが、これによって確実にSA応募者の数が減ることを考えると、可能な限り重なりを減らすよう配慮することが求められる。

4-2 SAを志望する理由の分析

本節では、学生がどういう理由でSAを志望しているのか、を分析する。そして、そこから今後さらにSA志望者を増やすためのヒントを探る事にする。

これに関する調査は、SAを志望する学生に対して、その志望理由としてあてはまるものを複数選択可で選んでもらう、という形式で行った。結果は図1の通りである。このグラフを見ると、志望理由としては「指導を通じて新たに学ぶ事もある」、「時給が高い」、「指導力を身に付けたい」といった内容が上位を

占めており、「時給が高い」という理由があるものの、多くの学生は、指導する事を通じて自分自身が成長あるいは向上することを求めてSAを志望していることがわかる。実際、これまでも多くのSA経験者が、指導することを通じて自身が成長できた事を口にしてゐる。そこで、これら過年度SAの経験を学生に的確に伝えることが、SAの人員を確保する上で有効と考えられる。

次に、この志望理由を学年別に見てみよう。図2と図3はそれぞれ、3年生および2年生の志望理由を示すグラフであるが、上位3つは共通で全体の傾向と同じである。両学年共に「指導を通じて新たに学ぶ事もある」が最も多く、それぞれのSA志望者の過半数を占めている点特徴的であり、2年生に至っては6割以上がこの理由を挙げている。

一方、1年生の志望理由は図4に示すように、若干傾向が異なっている。グラフから分かる通り、「SAのお世話になったから」という理由が上の学年の倍近くの39.3%を占め、これが第一位になっている。これは、1年生の場合は、SAに丁寧に指導してもらったことから今度は自分が後輩達をそのように指導

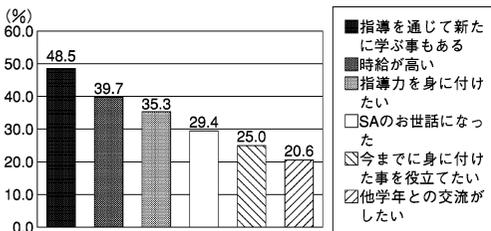


図1 SAを志望する理由 (回答者全体)

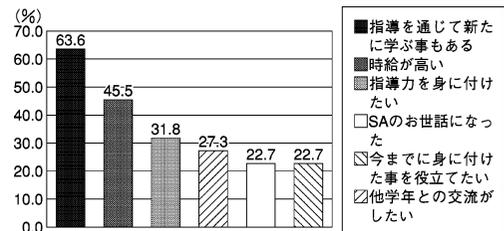


図3 SAを志望する理由 (2年生)

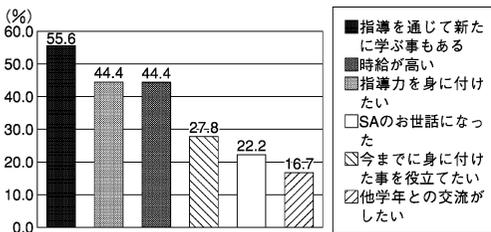


図2 SAを志望する理由 (3年生)

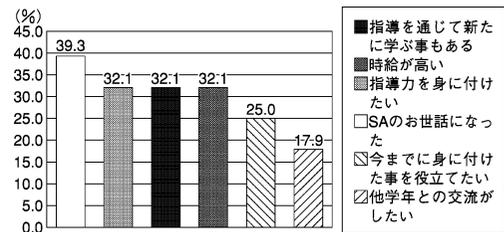


図4 SAを志望する理由 (1年生)

してあげたい、という気持ちが志望理由につながっている事を示している。

ところで、1年生がお世話になった SA には、当然2年生と3年生が含まれる。そしてこれら両学年は上で見たように SA を通じて自身を成長させたいという、強い向上心を持っていた。そこで、1年生が SA にお世話になった事を SA 志望理由のトップに挙げているのは、これら向上心を持った SA の指導が1年生に評価された結果と考えられないだろうか。もし、そうだとすると、数は少なかったものの、2007年度に活動した2年生および3年生の SA の質は決して低くはなくむしろ高かった事が推測される。

さて、一般的に考えて、学生が SA を志望する際には、当該科目の内容に興味・関心があることが前提と思われる。この点を定量的に確認するため、SA 志望の有無と演習科目に対する興味度との関係を次のように調べてみた。すなわち、SA 募集科目の学習内容についての興味度を問う設問の結果から、回答者を「興味がある」、「何ともいえない」そして「興味がない」の3つの回答グループに分け、各々のグループで SA を志望する学生の割合を求めたのである。その結果が図5である。このグラフより、興味のあるグループでは、34%もの学生が SA 志望であり、その割合は興味薄れるにつれて急激に下がっている事が分かる。なお、SA 志望の有無と演習科目興味度で相関分析を行った結果でも、相関係数が0.289、有意確率が0.000であり、危険率

0.1% (0.001) 水準で「演習科目に興味がある人程、SA に志望する」という正の相関が確認できた。これによって、確かに演習科目に興味・関心を持っている学生程、SA に志望する傾向があるといえる。当たり前的事ではあるが、当該科目の学習内容が学生の興味・関心を引き出すように担当教員が工夫・努力することは、SA を確保するという観点からも重要であると言える。

このように、演習科目への興味度が SA 志望の有無に影響を与えているということが確認できたが、実はもう一つ、SA 志望の有無に影響を与えている理由があることが分かった。それは「SA 経験の有無」である。SA 志望の有無と SA 経験の有無の相関を調べてみると、相関係数が0.443、有意確率が0.000で危険率0.1% (0.001) 水準でかなり強い正の相関が見られた。このことは、一度 SA を経験した学生は、再度 SA をやる傾向が強く、SA への定着度が高いということを示している。

これは、SA 制度としては好ましい傾向である。もし、一度経験した SA がやめなくなるような状況であるとする、SA 制度は恐らく維持できないであろう。しかし、幸い状況はそうならないのである。ただ、特定のグループのみが繰り返し SA をやる、という傾向に陥る可能性もあるので、やはり SA 不足を解消するためには、幅広い層に SA を経験してもらう事が必要である。本節の冒頭で述べた様な、SA をやることによって成長できる、というメッセージを学生に伝える事、などを含めた、SA 候補者に対する学部からの働きかけがもう少し必要なかも知れない。また、現職 SA からの SA への応募を促す働きかけも有効と思われる。実際、SA である高橋が自分の担当学生に声をかけた結果、その学生が次期の SA に応募し、現在も SA として継続して活躍している、という事例がある。

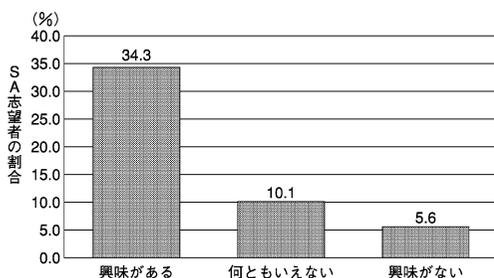


図5 SA 志望者と演習科目興味度の相関

4-3 SA を志望しない理由の分析

本節では、SA を志望しない学生を対象にその理由を分析する事にする。結果は図6に示す通りである。グラフより、志望しない理由として「教える自信がない」という回答が全体の約7割で最も多く、2番目に割合が多い「SA をやる時間的余裕がない」の倍以上に達している。この傾向は学年別に見ても同様であった。このことから、SA を志望しない学生を減らすためには、「教える自信がない」という学生をできるだけ減らすことが重要であると言える。そこで、以下ではこの「教える自信がない」という理由に絞って考察する事にする。

さて、学生が「教える自信がない」と言うときには、どういう事由がその背景にあるのであろうか。前節では、演習科目に興味・関心を持っている者程、SA に志望する傾向にあるということを確認した。では、教える自信がないと答える学生は、演習科目に興味がない学生なのであろうか。この点を確かめるために、「教える自信がない」を理由に挙げた学生を対象に、演習科目に対する興味度を調べてみた。その結果、興味があると回答している学生は59.4%と約6割に上り、必ずしも、演習科目に対する興味のなさが教える自信のなさにつながっている訳ではないことが分かった。このことはまた、演習科目に興味・関心を持たせる、ということだけでは「教える自信がない」学生を減らすことはできないことを意味している。

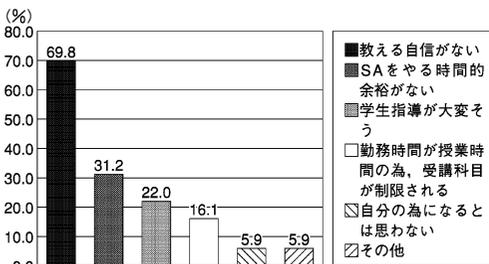


図6 SA を志望しない理由 (回答者全体)

ここで翻って考えると、そもそも他人に物事を教えるということは高度な作業で、それが難しいのはある意味で当然である。しかし、SA に求めているのは、課題チェックや質問への応答など、担当教員の指導の下、ある限定された範囲内で学生を支援することである。したがって、教えるというよりも学生支援という意味合いが強い。この点、SA の業務内容を学生側が過大に捉えている可能性がある。実際、担当教員の目から見て十分に SA として活躍できる、と見込んだ学生に SA への応募を勧めたものの「自信がないから」と断られるケースが少なからずあった。自身は学習内容を理解できていても、それを人に教える自信はない、という訳である。性格的に人と接するのが苦手と言うことであれば無理に勧める事は適当ではないが、潜在的な能力を持っていても、「教える」ことに必要以上に高いハードルを想定しているため、そこで逡巡し一步を踏み出せない層は少なからずいると思われる。そこで、彼らの内の一部は、SA の業務内容が事前に把握できるならば、SA にチャレンジしようという気持ちに転化する可能性がある。そして彼らが SA として活躍することが期待される。実際、以前行った SA の資質に関する分析によると、講義・演習の流れを的確につかんでいけば、受講時には必ずしも成績優秀ではなかった学生も SA として遜色なく学生指導できることが報告されている (森田, 2005)。

この点に関連して、次節でふれる SA に対するアンケートでも、演習の前あるいは後にミーティングをやって欲しい、という要望が現職の SA から出されている。これはミーティングによって当該演習のポイントや重要事項を担当教員が明示してくれると、それを指導に反映しやすく、安心できるというものである。現在多くの科目でミーティングに相当する打ち合わせを行っているが、これをさらに徹底して欲しいということであろう。

以上の事から、教える自信のなさを緩和するためには、SA に求められること、すなわち業務内容、さらには SA に期待することや心構えなどを事前に明示することが有効と思われる。そして、SA が丸抱えで学生を教えるということではなく、担当教員の下で学生を支援する業務である、ということが周知されると、チャレンジしてみようという学生も増えることが期待される。

4-4 SA アンケートにみる SA 制度への要望

前節までは、学生に対するアンケート調査結果を基に、SA 志望者をさらに増やすためにはどうすれば良いのかを考察してきた。本節では、現職 SA に対するアンケート調査から、彼らが SA 制度に対してどのような要望を持っているのか、を把握することを試みる。ここで集約した要望を何らかの形で実現することができれば、SA のやる気がさらに引き出され、彼らのパフォーマンスも上がることで期待される。そうすれば、SA 制度もより充実し、志望者も増加するであろう。なお、第 3 章の表 3 で示した通り、アンケート調査は 2007 年度前期に採用された SA の内 21 名に対して行った。

さて、SA 制度に対する要望の選択肢として我々が用意したのは「SA の活動が単位として認定される科目」、「各授業の開始・終了時のミーティング」、「学生指導のトレーニングを行う研修会・講習会」、「SA の意見交換の場」などであった。以下、これら要望項目の選択状況を順にみて行こう。

最も要望が多かったのは「SA の活動が単位として認定される科目」の設置を求めるという意見で、21 名中 13 名から出された。これは、意外な事で、我々としても過半数の SA からの要望があるとは予想していなかった。彼ら SA が他大学の状況などを把握しているとは思えないが、実際に、北海道大学において、TA の活動が単位として認定される科目が設

置されているという実例がある。それは、『日本ではおそらく初めての本格的な「TA の単位化」の実例として、北海道大学全学教育「情報学 I」の TA を対象に平成 18 年度から大学院共通科目として導入された「情報学教育特論」である』（小笠原・他、2003）。同科目の具体的な教育内容や運営方法などについて、今後調査する必要があるであろう。一方、SA の活動が単位として認定された事例は現状では把握していない。とは言え、本学部では先進的に SA を導入し、SA 自身を教育・育成することも念頭に置いて同制度を運用してきた経緯がある。そこで、これまで学部で蓄積してきた SA 育成の方法論を生かして、先進的に単位認定科目を設置する事は意義があるであろう。現行のアルバイト的な性格との整合性などクリアすべき点はあるが、検討に値すると思われる。もし、実現すれば、SA を育成する事が明示的に学部のカリキュラムに位置づけられることで SA 応募者も増え、結果的に質の高い SA の育成につながる事が期待できる。

次に多かったのが「各授業の開始・終了時のミーティング」の実施を求める意見で 9 名から寄せられた。現在でも、いくつかの科目では毎回、講義開始前に当日の予定、課題チェック状況や出席状況についてのミーティング、そして講義終了後には当日の反省・総括、次回の予定についてのミーティングを行っている。ミーティングがある科目では、毎回、教員から当日の学習内容の概要や、出欠や進捗状況から注意が必要な学生への対処、課題進捗状況の目安などが提示されるので、学生指導の参考になり、授業の進行も円滑になるという利点がある。一方、このようなミーティングを行っていない科目もある。この点については、自由記述の回答に「授業前に一度、教師と TA・SA で集り、授業内容の確認や短い時間でいいから授業の予習を行う時間を設けてほしい。各自、予習をし、わ

からない点は教師にメールするのはあまり適切ではないような気がした.」,「進行があまりうまくいかないのではないかと思う. 授業内容がみんな把握できていないから, 集まる機会をもうけてほしいです.」という具体的な意見が寄せられている. やはり, 授業開始前あるいは終了後のミーティングを実施する体制を整え, 教員・TA・SA の連携を深め, 指導体制を確立していく事が肝要と考える. さらに, このようなミーティングによる指示内容の徹底や意志の共有は, 前節で触れた, SA を敬遠する理由になっている「教える自信のなさ」を緩和する効果があると思われる.

次いで「学生指導のトレーニングを行う研修会・講習会」を望む意見が6名からあった. 現在は, 演習科目毎に, 必要に応じて担当教員がSA に対する指導を行う, という形式が主であるが, SA 達はもっと系統的なトレーニングの機会を希望しているようである. 確かに, SA の業務内容を理解し指導力を向上させるという観点から, 何らかの講習会を設定することは有効である. また, 4-2 節で調べたように, SA を志望する学生の多くが, SA を通じて自身を向上させることを望んでいることを考えると, これは, その期待に応えるものであるとも言える. さらに, そうしたトレーニング体制がきちんと整えられれば, 潜在的能力がありながらも「教える自信がない」とSA を敬遠していた学生の不安を緩和できるものと思われる. この意味で, 学生指導に関するトレーニングの機会を設けることは, 安定的にSA を確保するためにも重要であると言える. 問題は, その実施形態である. 本格的な講習会を定期的に行うとなると, それは, 上で述べたようなSA 活動に関する単位認定科目でもなければ実現は困難である. ただ, 採用時にSA 全員を対象とした講習会を開き, SA の心構えや指導上の注意事項などを徹底する, という事は可能であろう. 具体的な実施形態については, 今後検討すべき

課題である.

最後に, 「SA の意見交換の場」を望む意見が5名からあった. これは, 科目内容の教え方の工夫や学生指導上の問題点等について, SA 同士で意見交換し合う, あるいは教え合う場が欲しいという意味である. 実際, 2003 年度には, SA 用の掲示板を用意し, そこで, 活発な意見交換が行われた(清野, 2004). そしてそのとき集約されたノウハウがSA マニュアル(清野・森田, 2004)となって結実し, 現在に至ってもSA がそれを参考している. こうした実績を考えると, SA 同士の意見交換の場を何らかの形で用意する事は有効と思われる. 現在, 科目毎に, 指導記録の共有などを通じて, SA 同士の経験交流を促す様々な工夫がなされているので, それらの効果等については, また稿を改めて述べたい.

5 結論と今後の課題

本研究では, 社会情報学部で運用しているSA 制度への応募者が減少傾向にあるとの実態を定量的に把握した上で, 今後応募者を増大させるためにはどのような方策が必要か, という考察を, 学生を対象にしたアンケート結果を基に進めてきた. その結果以下の点が明らかになった.

まず, 明らかになった事実は1年生~3年生の回答者全体の4人に1人はSA をやってみたいと思っているという点である. つまり志望者自体は決して少なくないのである. ところが実際の応募者は少ない. その原因は色々考えられるが, 例えば専門ゼミと当該演習科目との時間割上の重複や, 前期のSA 募集期間の短さ(時間割が公表されてからの期間の短さ)などが, その候補として挙げられる. やむを得ない事情はあるものの, やはり可能な限り彼らが応募しやすいように工夫・配慮することが望まれる.

続いて, SA へ志望する際の理由, およびSA を志望しない理由の分析を行った. まず

前者は 4-2 節で述べたように、SA 志望者は「指導力を身に付けたい」、「指導を通じて新たに学ぶ事もある」といった自分自身の成長・向上につながることを求めて志望している事が分かった。したがって、この要望に応える事が SA 自身のやる気を高め、さらには安定した志望者を確保するために必要である。その観点から、現職の SA が要望している「学生指導のトレーニングを行う研修会・講習会」の設定は、意義があると思われる。さらに、4-3 節で調べたように SA を志望しない理由が「教える自信がない」ことである、という点を考えると、このような講習によってその不安を緩和させることができるとと思われる。また同節で指摘したように、採用後の講習会のみではなく、募集時に学生支援としての SA 業務の内容や SA に求められることなど、を具体的に伝える工夫をすれば、応募者の不安は緩和され、より積極的に応募するようになる可能性がある。さらに、同じく現職の SA から要望があった「各授業の開始・終了時のミーティングの実施」による指示内容の徹底や意志の共有も、「教える自信のなさ」から来る不安を緩和する効果があると思われる。

また、SA を志望する理由に関連して、当該演習科目に興味を持っている学生ほど SA を志望する割合が高いことが確かめられた。当然のことではあるが、学生の興味・関心をひきつける講義・演習を行うことが当該科目の SA を安定的に確保するためには必要であろう。さらに、一度 SA を経験すると、継続して志望する傾向が強いことも分かった。この様に SA としての定着度が高いことは、SA 制度にとって好ましいことであり、この点では現行 SA 制度の運用の仕方に大きな問題はないと評価できる。

最後に、現職の SA への調査から、今後の SA 制度への要望として、上で述べた「学生指導のトレーニングを行う研修会・講習会」、「各

授業の開始・終了のミーティングの実施」以外に、「SA の活動が単位として認定される科目の設置」と「SA の意見交換の場」が要望としてあることが分かった。特に、単位認定科目に対する要望が最も多く、過半数の SA が希望している。SA の育成を学部のカリキュラムに明示的に位置づけられれば、SA を通じて自身の向上を求めている SA 志望者の要望にも合致し、SA の質もさらに向上することが期待される。現行のアルバイトとしての正確との整合性など、クリアすべき点は多いが、今後検討する価値は十分にあると思われる。

以上より、減少傾向にある SA 制度については、時間割上の配慮や、募集期間や SA 対象科目の時間割の事前明示、そして SA の業務内容を募集時により具体的に示すなど募集方法の工夫に加え、講習会などによる SA 育成体制の充実、また、演習前後のミーティングによる指示内容の徹底などを行うことが方策として有効と考えられる。そうすることで、SA 通じて自身の向上を望んでいる志望学生の要求に応え、また潜在能力がありながらも「教える自信のなさ」から躊躇している学生の不安を緩和することにつながり、より多くの SA が応募するようになることが期待される。今後は、この観点から、これらを具体的に実現して行くことが求められる。

謝 辞

本論文執筆に当たって、アンケート調査にご協力頂いた、社会情報学部教員の並びに非常勤講師の方々、また、2007 年度 SA の皆様と受講生の方々に感謝いたします。また、統計情報を提供して頂いた札幌学院大学教務課及び情報処理課の職員の方々にお礼申し上げます。本論文は、社会情報学部研究生・高橋の研究生論文としてまとめたものです。

参考文献

森田彦(2005)「学生教育補助員を活用した演習教育——「プログラミング」の場合——」『社会情報』Vol.14, No.2: 151-166

小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤(編)(2006)『高等教育シリーズ139 TA実践ガイドブック』玉川大学出版社

清野瞳(2004)「SAを活用した実習教育の現状と課題」『札幌学院大学社会情報学部2003年度卒業論文』, <http://su10.sgu.ac.jp/~morita/Seminar/8thStudent/sotuken/seino/>

清野瞳・森田彦(2004)「学生教育補助員(SA)マニュアル」札幌学院大学社会情報学部

資料

1. 受講生用アンケート調査票 (抜粋)

本論文執筆にあたって分析に用いた質問項目を以下に示す。

・入学年度 (S0*) を教えてください。 S 05 ・ S 06 ・ S 07

・演習科目全般にどのくらい興味・関心を持っていますか。当てはまるもの1つに○を付けて下さい。

- | | | |
|--------------|--------------|------------|
| 1. とても興味がある | 2. まあまあ興味がある | 3. 何ともいえない |
| 4. ほとんど興味がない | 5. 全く興味がない | |

・今までに SA をやった経験がありますか。 ある ・ ない

・今後, SA をやってみたいと思いますか。 はい ・ いいえ

・「はい」と答えた方にお聞きします。なぜ, SA をやってみたいと思いましたか。当てはまるもの全てに○を付けて下さい。

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. SA のお世話になったから | 2. 指導力を身に付けたいから |
| 3. 今までに身に付けた事を役立てたいから | 4. 教職課程を受けているから |
| 5. 指導を通じて新たに学ぶ事もあるから | 6. 他学年との交流がしたいから |
| 7. 時給が高いから | 8. その他 |

・どの科目の SA をやってみたいですか。当てはまるもの全てに○を付けて下さい。

- | | | |
|--------------------|-------------------|---------------|
| 1. 情報処理基礎 | 2. データ解析基礎 I | 3. データ解析基礎 II |
| 4. データ解析 I | 5. データ解析 II | 6. プログラミング |
| 7. データ構造とアルゴリズム論 | 8. データベース基礎 | |
| 9. マルチメディア処理論 | 10. 情報通信ネットワーク論 | |
| 11. コンピューティング環境管理論 | 12. コンピュータアーキテクチャ | |
| 13. 情報メディア演習 I | 14. 情報メディア演習 II | |

・「いいえ」と答えた方にお聞きします。何で SA をやりたくないと思いますか。当てはまるもの全てに○を付けて下さい。

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| 1. 教える自信がないから | 2. 自分の為になるとは思わないから |
| 3. 学生指導が大変そうだから | 4. SA をやる時間的余裕がないから |
| 5. 勤務時間が授業時間の為, 受講科目が制限されるから | 6. その他 |

2. SA 用アンケート調査票 (抜粋)

本論文執筆にあたって分析に用いた質問項目を以下に示す。

- ・入学年度 (S0*) を教えてください。 S 04 ・ S 05 ・ S 06
- ・昨年度までに SA の経験はありますか。 ある ・ ない
- ・今後も SA をやりたいと思いますか。 はい ・ いいえ
- ・SA をやることになった動機として、当てはまるもの全てに○を付けて下さい。
 1. TA・SA の世話になったから
 2. SA の仕事に興味があるから
 3. 先生に頼まれたから
 4. SA 経験者に誘われたから
 5. SA 経験者以外の学生に誘われたから
 6. 時給が高いから
 7. その他
- ・今後の SA 制度にあった方が良くと思うもの全てに○を付けて下さい。
 1. 授業前後のミーティング
 2. SA の活動が単位として認定される科目
 3. TA・SA の意見交換の場
 4. 学生指導のトレーニングを行う研修会・講習会
 5. SA のたまり場
 6. その他